

第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム  
「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」  
〈記念講演〉

歴史的視点から見た日米中関係の現在

—ヴォーゲル先生に敬意を込めて—

國分良成

(慶應義塾大学名誉教授、前防衛大学校長)



皆さま、こんにちは。ただいまご紹介を頂きました國分良成と申します。

今日は、この懐かしい愛知大学にお招きいただきまして嬉しく光栄に思います。校舎そのものはかなり新しくなっていますが、旧来の校舎によくお邪魔をして、非常勤でも何回か講義をさせていただきました。また、現代中国学部を設置する際にも、加々美光行先生に頼まれて少しお手伝いをさせていただいたこともあったように記憶しています。戦前の中国研究の一つの拠点であった東亜同文書院大学を前身とするこの愛知大学は、日本の中国研究のなかでも際

立った地位を占めてきたと思います。

ここにこうして立ってお話をしているだけでも、本当に懐かしい顔がたくさんおられて、同窓会でもやっているような気分になってまいります。川井伸一学長とも若い頃から長くお付き合いをさせていただきました。また、もちろん佐藤元彦先生もよく存じ上げておりますし、今日はまた同じパネルリストで李廷江さんもおられます。日中関係を今後どうしたらいいかということで、1980年代に国際文化会館に「中国社会科学研究会」といった団体を立ち上げた方で、私も協力させていただきました。

ただいまご紹介いただきましたように、現在は比較的自由的な身になりまして、なんでも言いたいことを言わしてもらえることになりました。ただ、最近も講演をよくやりますと、「國分先生って慶應にいたことがあるのですね」と言われるぐらい、最近防衛大学校の色の方が濃くなってまいりました。最近はやりの安全保障の面では、普通では経験でき

ないことをいろいろ見聞してきました。尖閣諸島の現実も偵察機で上から何回も見てまいりましたし、そういう意味では、臨場感が以前よりは出てきたかなという感じがするわけです。

今日のこの会は、言うまでもなくエズラ・ヴォーゲル (Ezra F. Vogel, 中国名：傅高義) 先生を顕彰するという意味が込められているわけですが、私はその前に、愛知大学がここまで頑張られてきたことにまず敬意を表したいと思います。実は私自身の机の上にも『中国 21』が置いてありますけれども、とても内容豊かで面白いですね。日本の学術水準の、まさにトップを表しているのではないかと、とも私は思っております。そういう意味で、すべてが東京に集中しているという状況のなかで、愛知大学の現代中国研究がここまで頑張っておられることに敬意を表したいと思います。

ヴォーゲル先生との関係について話します。私は今から 40 年前にハーバード大学に留学することになりまして、その時に、私の慶應時代の恩師である石川忠雄先生に推薦状を書いてもらったのです。宛先はベンジャミン・シュウォルツ (Benjamin Schwartz, 中国名：史華慈) 先生でした。ところが、1 カ月経っても、2 カ月経っても返事が来ない。これはベンジャミン・シュウォルツ先生に出しても駄目だということで、石川先生がエズラ・ヴォーゲル先生に急いで出したところ、すぐに返ってきました。「申し訳ない」と。「ベンジャミン・シュウォルツ先生は、学者としては超一流だけれども、行政に関わることを一切やらない。だから、手紙の返事は書かないのです」ということだったのです。慌ててヴォーゲル先生が頑張ってくれたようでして、私はそのままハーバードに行くことができたというところから、ヴォーゲル先生との付き合いが始まったのです。

次に、皆さま方にお話ししたいのは、今の中国研究がどういう問題を抱えているのかということを少し広い視野で考えてみたいと思います。この点をヴォーゲル先生がこれまで言われてきたことと結びつける形でお話ししてみたいと思います。

(1) 現代中国研究の現状と課題  
ヴォーゲル・アジア学からの啓示

(1) 現代中国研究の現状と課題  
ヴォーゲル・アジア学からの啓示

1. グローバル・アジア研究 (日本研究と中国研究の架け橋)
  - ・ かつて日米の中国研究者の対話は頻繁であった。
  - ・ 現在、アジア地域研究はタコ壺化しつつある。
2. 地域研究と理論 (比較) 研究
  - ・ 地域研究：言語、資料重視、フィールドワーク・・・
  - ・ 現在、米国は地域研究軽視・理論重視、日本は実証研究最優先だが・・・
3. 学術と政策の架け橋
  - ・ 学問と実務の対話と融合を重視する米国
  - ・ 融合面もあるが学問の独立性を重視する日本と学問と政策が分断する米国

第1に言えることは、アジア研究が「タコ壺化」しはじめているということです。それぞれの研究が「壺」にはまって、ミクロ研究に終始するという傾向があります。もちろんこれはある意味では仕方がない面があります。若い人たちにとってみると、偉そうなことをやっても博士号を取れないわけですから、そこで誰も見ていない細かいテーマで、できるだけ博士号を取りやすい面白い形にしようということです。しかしながら、問題はその個別のテーマを何のためにやっているのかという、その目的性が明確でないと、非常にぼやけてしまうわけです。

その意味で、エズラ・ヴォーゲル先生の研究は興味深いのです。ヴォーゲル先生は珍しく日本研究から入ってきた中国研究者でした。アメリカでは昔から中国研究者のほうが多く、今でも圧倒的に中国研究者のほうが多いと思います。昔の中国研究の、特に歴史をやっている人たちは、必ず中国語と日本語を勉強していました。日本語を勉強しないと良い中国研究者になれなかったわけです。日本の戦前の中国研究の各種の資料、もちろんこのなかには東亜同文書院の資料もありますけれども、中国研究は満鉄調査部をはじめかなり行っていましたので、そうした史料などを読み解かないと、中国研究ができないと思われていたということです。

特に、近代史をやっているアメリカの中国研究者たちは、その多くが日本に来ていたわけですし、日本語を勉強していました。だから、私も今ではアメリカで偉くなった先生たちと交流できました。例えば、ジョセフ・エシェリック (Joseph Esherick, 周錫瑞) さんやピーター・バン・ネス (Peter Van Ness, 範内斯) さんとは、大学院時代に日本語と英語の交換をしまして、それ以外にも慶應にたくさん研究者が来られていました。スチュアート・シュラム (Stuart Schram, 施拉姆) 先生は慶應に長く滞在しまして、軍閥研究のジェローム・チェン (Jerome Ch'en, 陳志讓) 先生も慶應におられ、そういう方々と気楽に議論できたのです。1970年代まで外国人は容易に中国に入れないので、香港に行っていたわけです。その香港の帰り道に日本に立ち寄って、しばらく日本に滞在するということが多かったのです。そんなことで、我々の時代はアメリカの中国研究に比較的近かったという感じがいたしました。もちろん慶應という場にいたことも幸運でした。

ところが、最近はまだ「タコ壺化」が激しくなってきました。もともと日本研究からスタートしたエズラ・ヴォーゲル先生は中国研究に入ってこられましたが、社会学者でしたのでフィールドワークができないと、これは難しいわけです。ヴォーゲル先生は広東省についても研究されましたが、広東のなかには入っていなかったと思います。その頃は香港で、中国本土から脱出してくる中国人にインタビューしながら本を書かれていたと思います。しかし、それが時を経て改革開放の時代のなかで「広東・アズ・ナンバーワン」ではないのですが、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の中国バージョンのような本 (*Canton Under Communism*) を出版されました。その後は、鄧小平の伝記 (*Deng Xiaoping and the Transformation of China*) を書くことになり、さらに、『日中関係史』 (*China and Japan: Facing History*) も書かれました。

ここまで幅広くできる研究者は、エズラ・ヴォーゲル先生の前にもいなかったけれども、後にも続いていません。今では名誉教授クラスで近代中国を研究している人のなかには日本語ができる人が一部いますが、アメリカの中国研究者で、日本語ができる人はほぼいないということです。

第2に申し上げたいのは、理論研究と地域研究、つまり「エリア・スタディーズ (area studies)」のあり方についてです。アメリカの場合、今は理論研究がすべての中心ですから、特に冷戦が崩壊してからは地域研究をやってもあまり意味がないという状況になっています。政治学の分野でいいますと、各地域をどう理論化できるかというところが最重要になってしまいました。経済学だったらある程度分かるのですが、政治学もそうなりましたので、政治学の雑誌を見ても、半分はほとんど数式と難しい方程式が並んでいるという、こういう状況が今起きているわけです。

アメリカの学界で地域研究だけをやっている研究者では、大学は採用してくれない、なにか理論に結び付けないと難しいと思います。ですから、アメリカの中国研究者で現状分析をやりたい人はたくさんあるシンクタンクに行っておいてワシントン DC で働く、という形になっているのが現実だろうと思います。大学の先生たちは大学に残るために業績を上げて、それから教育で学生の評価を上げる、ということにならざるを得ないのです。

中国でも同じような現象が進んでおります。日本では過去も現在も実証研究が基本的に重視されております。ただ、理論的な方面も最近少しは重視されるようになってきました。いろいろな大学の採用過程を見ても、あまりに地域研究者に埋没していると、だいたい訳の分からない小さいことをやるようになってしまうので、少し理論研究ができる人たちにやってもらったほうがいいのではないかと、このような傾向が出てきている感じがします。

第3に学術と政策の問題です。アメリカの場合はこの間の棲み分けが非常にすっきりしていると私は思います。それは、ワシントンを中心としたシンクタンクの人たちと、大学に籍を置く学術界の人たちです。私が尊敬している中国研究者を3人挙げろと言われてたら、たぶん皆さんもご存じない方ばかりだと思います。ほとんどメディアに出たこともない人も多く、大学に在籍して学問としての研究レベルを高めていこうとするいわゆる学者の方々ばかりです。

ただ、アメリカの場合、見ているとお互いを排除するという傾向はそんなにないのだろうと思います。それぞれが、それぞれの仕事空間で暮らしているという感じがします。もちろん大学の先生が一部ワシントン DC に行っておいて、政府関係機関やシンクタンクに入る場合もあります。ヴォーゲル先生も国家情報会議 (National Intelligence Council, NIC) で働いていましたね。結局、それは個人の判断ですし、そうした経験がその後の研究にどう資するかという部分が重要ですね。

日本ではその辺がちょっとフエジーになりかけているという部分があるかと思いますが。それは、東京にすべてが集中しているものですから、そうすると研究だけでやっていけるかということ、そういうわけにもいかないくらい中国畑の市場が広がっているということです。だから、逆に言えば、愛知大学のほうがゆっくりと研究できて、さきほどの『中国21』ではないですけど、確かに素晴らしい学術論文を書く環境がそろっているという、そういうこともあるかもしれません。

現状分析は難しいのです。一体これがどういう意味を持つのかということ。例えば、今やっている研究が中国との実際の関係に、あるいはアメリカとの関係にどういう意味を持つのかという点を全く考えずにやることも、これまた問題があるわけです。そのあたりのバランスをどう保つかかが難しいと思います。

## (2) 日米中関係の歴史

## (2) 日米中関係の歴史

1. 1930年代～1945年： 米中 vs 日本の構図
  2. 1950年代～1971年： 日米 vs 中国
  3. 1970年代～1989年： 日米中 vs ソ連
  4. 1990年代～2010年： 日米、対中エンゲージメント（関与）
  5. 2010年代～現在： 日米 vs 中国
- ◆ 20世紀東アジア国際関係 ≡ 日米中関係

日米中関係を歴史的にたどってみますと、戦前を一言でいえば、「米中对日本」であったというのは誰の目にも明らかです。最後通牒である「ハル・ノート」には「日本が中国から手を引け」というのが入っているわけです。いつ頃からアメリカが日本を警戒するようになったかという、日本の中国進出が激しくなった1920年代後半からだと思います。その後1931年に満州事変があり、このあたりからアメリカの日本批判が強まったわけですが、そういう中で、抗日戦線の形成にどの程度アメリカが関与していたかについてはあまり研究が進んでいません。かつて旧日本軍の関係者にインタビューしたことがあります。宣教師が結構熱心に活動していて、その背後にアメリカ軍もいたように思えるというような話を聞いたことがあります。ただ注意しなければいけないのは、「米中对日本」というこの時代の中国とは蒋介石を中心とする国民党、国民政府の中華民国であって、中国共産党は中心にいなかったわけで、国民党がもちろん主流だったのです。

その後1950年代から1971年までになりますと、これは要するに冷戦状況のなかで「日米対中国」だったわけです。中国とソ連は1960年代以降、対立関係に陥りますが、アジアの冷戦はいわゆるヨーロッパの冷戦とは少し異なっていたのです。アジアでは朝鮮戦争によって米中が戦争に突入したことで、アジアの冷戦はつまり「米中冷戦」でした。この状況下で日本はまだ小さな存在ではありましたが、日米安保条約の改定を重ねて日米同盟の強化を進めました。この時代、日米両国は中国への対抗意識を中心に据えていたことは間違いありません。

1970年代に米中接近が起こってからは、特に1989年ぐらいまでソ連を仮想敵としながら、いわゆる「米ソの新冷戦」が始まりました。そういうなかで、「日米中对ソ連」という図式が出来上がり、日本は中国を円借款や民間投資などで支援し、中国側からも日本が防衛費を上げることは大いに結構だ、というようなことを言われたことすらあります。これはもちろん日米中がソ連と対抗するという図式があったから可能となりましたが、1989

年に天安門事件があり、そして冷戦が終結し、1991年にソ連が解体することで冷戦が終焉し、この図式が壊れたわけです。

そして2010年代に入りますと、米中対立が先鋭化していったのです。私は去年3カ月ぐらいスタンフォード大学に滞在したのですが、そこでアメリカの研究者たちに「いつから米中関係はおかしくなったのか」と質問すると、ほぼ共通項としてあったのが2010年前後という答えでした。これは、2008年のリーマンショックがやはり大きかったということです。2008年には北京オリンピックもありましたが、リーマンショックでアメリカ経済がここまで弱っているという認識が共通項になったあたりから、しかも、日本がGDPで世界第3位に落ちたのが2010年です。このあたりから中国が頭を下げるいわゆる「韜光養晦」（とうこうようかい）路線が終わったというのです。この頃から尖閣問題も揺れ動きはじめたのはご承知のとおりです。つまり、中国の強硬路線は2012年に習近平時代が始まる前から始まっていたということです。

2010年代から現在までは、どちらかという「日米対中国」という形の図式が出来上がってきています。現在、松下幸之助さんが生きていれば、競争相手とすべきで、敵となてはいけないというように言うのかもしれませんが、特に最近では台湾問題で「有事」議論が一斉に大きくなりました。

いずれにしても、私が申し上げたいのは、20世紀の東アジアの国際関係は、まさに日米中の三角関係が揺れ動くことで転回されてきたと思うわけです。

### (3) 日米中関係の共同研究 ヴォーゲル先生の関わり

### (3) 日米中関係の共同研究 ヴォーゲル先生の関わり

#### 1. 1990年代～2010年：数多くの日米中関係研究

- ・張蘊嶺主編『転変中的中美日関係』中国社会科学出版社、1997年
- ・Kokubun, ed., *Challenges for China-Japan-US Cooperation*, JCIE, 1998
- ・岡部達味・高木誠一郎・国分良成『日米中安全保障協力を目指して』勁草書房、1999年
- ・王編思・G. Curtis・国分良成『日米中トライアングル』岩波書店、2010年(英語版あり)
- ◆ 含意としての台頭する中国を国際社会にどう引き入れるか=エンゲージメント(関与)  
90年代後半(クリントン・江沢民時代)米中パートナーシップ(伙伴関係)を背景に

日米中関係について多くの研究プロジェクトが誕生したのは1990年代です。私自身も5つか6つぐらいの日米中プロジェクトに参加していたと思いますが、この頃が一番忙しかった時期でもあります。

- ① 張蘊嶺 (Zhang Yunling) 氏の本には私も参加しましたが、日米中の研究者たちが集まった論文集で、中国語版と英語版が出版されたと記憶しています。
- ② それから、2つ目の本も (Kokubun ed.) 英語版と日本語版両方が出版されています。JCIE (Japan Center for International Exchange) という日本国際交流センターの山本正理事長 (故人) が中心になって進めた日米中のトライアングル関係についてまとめたものです。これは欧米でも結構読まれたようです。
- ③ そして、3番目の本ですが、大体同じ時期に防衛省傘下の平和・安全保障研究所でこのようなプロジェクトができて、私も参加させていただきました。
- ④ 2010年頃、日米中のトライアングルの関係について、アメリカからはジェラルド・カーティス (Gerald Curtis, 柯蒂斯) 先生、中国からは王緝思 (Wang Jisi) 先生に入っただいてまとめられた書物で、これも日本語版と英語版があります。

この時代の日米中プロジェクトにどういう特徴があったのかということ、それは中国のエンゲージメントが含意にあったということです。つまり、国際社会に中国をどう引き入れていくかというのが、それが裏の含意であったのだらうと思います。

もちろんこれは中国を敵として扱うというわけではありません。ただ、私もいろいろな日米中の会議に出ていたのですが、大体、南シナ海問題で中国の軍事力拡張は何なのかという話がたくさん出てきたかと思うと、中国が突然巻き返しに入ってきて、「いや、靖国で日本の問題認識がおかしい」、「日本の歴史問題はどうなのだ」といったように、お互いに言い合うみたいなところが若干ありました。

ただ、国際システムの中に中国がどう入っていくのかという最終目標を、どのようにしてまとめていくかという課題が底辺にありました。その裏の意味は多分参加している中国の人たちも分かっていたと思います。

1990年代後半は米中のパートナーシップが唱われたクリントン時代です。まさにこの時代に、ヴォーゲル先生が国家情報会議 (NIC) に入ったことに象徴されるように、米中パートナーシップが始まり、対中エンゲージメントが主流となりました。

## 2. ヴォーゲル先生の関わり

- ・ 1998～2006：日米中会議：(日) 松永信雄、國廣道彦、田中明彦、国分良成  
(米) E・ヴォーゲル、J・ナイ、H・ハーディング  
(中) 陳啓懋、楊成緒、張毅君
- ・ 2000年代初頭：日米中3国共同研究：(米) E・ヴォーゲル (ハーバード大学)  
(中) 袁明 (北京大学)  
(日) 田中明彦 (東京大学)

*The Golden Age of the U.S.-China-Japan Triangle, 1972-1989,*  
Harvard University Press, 2002.

- ・ 2006～2017：日中戦争の国際共同研究 全6巻 慶應義塾大学出版会  
編集責任者：E・ヴォーゲル、山田辰雄、楊天石

◆ 歴史問題に関して日中の仲介役を演じたヴォーゲル先生

この部分では、ヴォーゲル先生ご自身が関係されていた国際会議のご紹介です。

- ① 1998年から2006年までは日米中会議という、表には公表していないいわゆる「トラック2」の会合がありました。コアメンバーがここに出ておりますが、この8年間で累計10回会合を開催し、発言の記録はたぶんすべて外務省に残っています。ヴォーゲル先生がアメリカ側の中心であり、ジョセフ・ナイ (Joseph Nye Jr., 约瑟夫·奈)、ハリー・ハーディング (Harry Harding, 何漢理) がメンバーでした。日中が歴史問題で対立していたことが多かったので、ヴォーゲル先生はその議論に結構入ってこられました。例えば、「歴史問題はどうするのだ」という中国側の問いに対して、ヴォーゲル先生は、「日本が軍国主義に陥ることはあり得ない」ということを明確に言ってくれました。そういうときに、日本側の参加者はほっとしたのです。
- ② それから、2000年代の初頭に日米中3か国の共同研究プロジェクトがあり、これはハーバード大学、東京大学、北京大学の3か国3大学で行われましたが、特に日米中の歴史的関係が中心テーマになっていました。その成果は、学術本としても出版されております。
- ③ そして2006年から2017年、これはヴォーゲル先生も一部参加されましたが、歴史問題に関する共同研究であり、3人の先生が共同編集の形で全6巻を出版されております。これに関してはいわゆる歴史問題が中心であり、その中でヴォーゲル先生はまさに仲介役を演じられました。

#### (4) 日米中関係の課題

#### (4) 日米中関係の課題

1. 今も日米中の枠組は有効か？ 台頭するASEAN、G20、韓国、台湾等
2. 米中の仲介に日本、日中の仲介に米国、これは成り立つか？
3. ポスト・対中エンゲージメントはあるのか？
4. 中国の鄧小平路線回帰 = 「社会主義市場経済」はあるのか？
5. 米国のアジアへの関心は不変か？
6. 日本はパワーと魅力を再生できるか？

ここでは、今でも日米中の枠組みが有効なのかという課題を提起したいと思います。どのような国が参加国になるにしても、多国間協議の枠組みはありえるし、有効なわけですから、日米中も当然にその一つになりえるとは思いますが、ただし、一つはお互いにとってのメリット、あるいはそれをやることの魅力、これが何なのかということです。中国は今後エンゲージメントに関心がないとしたらどうするのか。つまり、中国自身が国際システ

ムに入りたいような口ぶりは見せていますが、実際の行動パターンを見てみると、なかなか厳しいのが現実です。そうした現実のなかで、お互いにとって魅力があるかないかということですが。

では、日本はどのようなのでしょうか。30年間も全く経済が上向かずに、一体、日本というのはどこに魅力があるのか、中国にとって日本はどういう魅力があるのか。これは昔から非常に大きな議論があって、実はエンゲージメントの最中の1990年代後半には、日本はかなり無視されていました。なぜかというと、米中でやればいいのであって日本はいらぬというような態度です。ということも関係して、江沢民時代は歴史問題が前面に押し出されました。

ところが、胡錦濤時代には、中国は日本が必要であるということになりました。なぜかかというと、日米両国は同盟関係を重視して、ますます両国関係は一体化していきました。そうすると、日米関係が非常に強固なものになり、中国は日本だけでなく米国にも対応しにくくなりました。アメリカも日本から強い影響を受けていたのです。このようなところから、中国の胡錦濤政権は日本との「戦略的互惠関係」を構築する方向に動き出しました。それが胡錦濤時代の日中関係です。

このように、中国は対米関係の構図の中で日本との関係を調節する傾向がもともと強かった面があります。現在、習近平政権は全体として日本に近づこうとしています。これは恐らく経済の要素が大きいと思いますが、打算や利益で態度をコロコロ変えるのではなく、もっと大きなところで日本に対する意味を考えてほしいものです。

現在、ASEANも大きくなってきましたし、G20もあり、韓国も台湾も大きくなってきました。こうしたところと今後どういう形で組むかという話もあるかと思いますが、そうした組み合わせの一つが依然として日米中なのです。

これについては、以前特に日中関係が歴史問題でおかしくなった時、ヴォーゲル先生がブッシュ大統領に「日中の調停をしたほうがいいのでは」と提言しておられましたが、これは結局、立ち消えになりました。それ自体は大きな議論にはなりませんでした。そういう時期もありました。

結局のところ、「米中の仲介に日本」、「日中の仲介にアメリカ」ができないかということですが、これはなかなか難しいところがあります。やはり大事なものは、2国間関係をそれぞれがきちんとやったほうがいいと私は思います。結局のところ、米中対話と日中対話がしっかりしていることがすべての前提です。

エンゲージメントの先になにがあるのかということ、問題は中国がその気になってくれるかどうかということです。今の米中関係を見ると、それは難しいでしょう。ヴォーゲル先生の鄧小平の本を見れば分かりますが、今の中国はここから離れて「社会主義」を強調しています。今の指導者の習近平は「社会主義市場経済」は言うのですが、市場経済を重視した「鄧小平路線」に対しては懐疑的で、「鄧小平」という名前すらほとんど言及しません。その意味で、恐らくヴォーゲル先生も晩年、心中は複雑だったはずですが。

たしかに市場化を続けると、党指導の市場経済ですから腐敗が増えるのです。中国社会では今でも腐敗が増えていると言われていています。そうしないと底辺では生きていけないようです。鄧小平路線の比較的良い面については、ヴォーゲル先生が描き出していると思いますが、中国社会に特有の腐敗現象をどう除去するのでしょうか。習近平は、だからこそ

監督を強め、強権を発動するのですが、その度を超すと人々は委縮します。こうした部分にこそ、今日の「中国のジレンマ」が存在するのです。

恐らくアメリカは、誰が大統領になったとしてもアジアに対する関心は不変だと思いません。もちろんアメリカの大統領選挙で外交問題は後回し、しかも外交問題の第1は中東、2番目はウクライナ、3番目以降が東アジアということになるのでしょうか。とはいえ、経済的に台頭し躍動するアジアに対する関心は今後も変わらないと思います。よくトランプ政権になったらアメリカは大きく変わるのではないかと言うのですが、トランプさんはすでに4年大統領だったのですが、この地域で大きな変化が起きたわけではありません。特に安全保障に関して言えば、ワシントンがどう変わろうと、第7艦隊の仕事はそれほど大きく変わるわけではなく、北朝鮮と中国が主たる関心であり続けることは変わらないと思います。ワシントンで大騒ぎになったとしても、現場では簡単にすべてが変わるわけではありません。

ただ、最後に申し上げておきたいのは、日本自身がパワーと魅力を回復できるかということの根幹は、経済しかないということです。この力をつけないかぎり、日本の魅力は戻ってこないということを申し上げておきたいと思います。

#### むすび—米中の不透明性と中国の未完の革命

### むすび—米中の不透明性と中国の未完の革命

- 米中両国の不透明性—山積する国内矛盾とリーダーシップ
- 中国の内政と習近平指導部の将来—体制危機の恐怖
- ヴォーゲル先生の悲観と楽観—鄧小平路線の混迷、胡耀邦への関心
- 未完の中国革命—B・シュウォルツの問い（厳復と西洋）

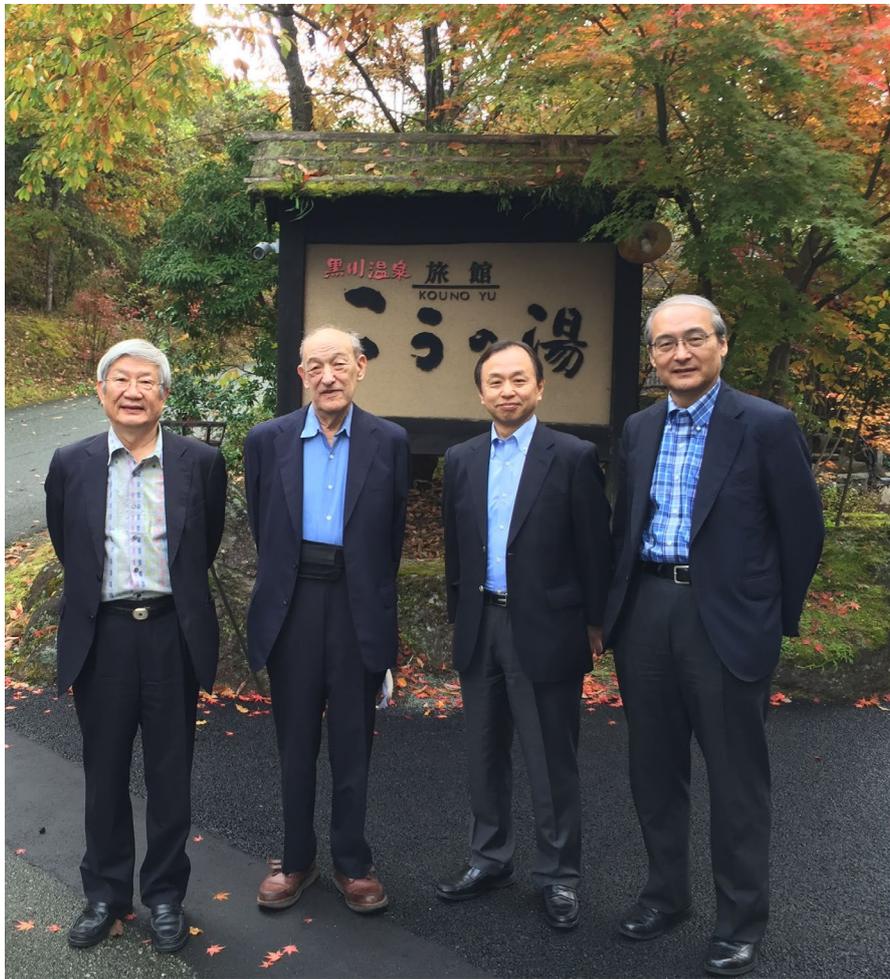
ヴォーゲル先生は鄧小平について書いた後、胡耀邦の伝記を書こうとしていたと思います。しかし、現実の中国はそうした過去の指導者の立場からどんどん離れていきます。恐らくヴォーゲル先生の最後の悩みはこのあたりにあったのだらうと思います。

そうした点を見ると、ベンジャミン・シュウォルツ先生の本はやはりすごいと思うのです。シュウォルツ先生の問題提起は、一言で言えば、「価値」の問題です。清末の中国分析ですが、先生はそれが一貫して解決できておらず、絶えず中国の伝統的価値に立ち戻ろうとすると主張しています。つまり、巨大な国家をつくり上げるために西洋の文化や技術を取り入れてみるけれども、最後は中国的伝統に依拠して解釈するようになり、そこに

限界が生まれます。そこには絶えず「価値」の問題が残るという問題を提起したのです。そのあたりの分析と思考が、中国近代史における「西洋の衝撃」(Western Impact)を強調するジョン・フェアバンク(John K. Fairbank, 費正清)先生と若干違うのではないかと思います。これこそシュウォルツ先生の凄さだと思います。こういう分析や思考がやはり重要だと私は感じております。

最後の写真ですが、実はここにヴォーゲル先生がおられます。これは熊本の蒲島郁夫知事も出席された五百簷頭眞熊本県立大学理事長主催の国際シンポジウムのときの写真で、シンポジウム後の黒川温泉での一コマです。これは2015年に開催されたのですが、私は当時防衛大学校長で、その前任の学校長が五百簷頭眞先生です。防衛大学校長の私の後任が久保文明先生ですので、これは非常にめずらしく面白い写真なので、最後に出させていただきました。

本日はご清聴いただき、どうもありがとうございました。



左から五百簷頭眞(元防衛大学校長)、エズラ・ヴォーゲル(ハーバード大学名誉教授)、  
國分良成(前防衛大学校長)、久保文明(現防衛大学校長)  
(熊本県黒川温泉にて、熊本県立大学主催シンポジウムのあとで、2015年)

出所：國分良成氏の提供による